

家族の大切さ

鹿児島県立錦江湾高等学校 一年

わかばやし のぞみ
若林 希

「家族皆でからあげ屋さんをたちあげたいね」
そう家族で夢みた日から、一年の年月をかけずっと心待ちにしていた開店日だ。楽しみな気持ちと不安でいっぱいだったが、精一杯手伝いをして皆で楽しく働き、一ヶ月が経った。そろそろ慣れてきたかなと思っていた日のことである。

休憩に入った母が、青ざめた顔で腰が痛い
と訴えた。しかし、「大丈夫」という母の言葉で、きつと大丈夫なのだろうと聞き流していたが、次の日もまた次の日も腰の痛みを訴えたため、少しずつ不安になっていた。そこで、明日病院へ行こうと話をした日の夕食の時、母が突然倒れた。たとえることのできな

みるみる回復し、普通ではありえない一か月という期間で家に帰ってきた。とはいってもベットに寝ていることしかできなかったため、父と姉と弟と不器用なりに皆で母の世話をした。母の帰ってきた家の中は急に明るくなった。
今、母は後遺症の吐き気と闘いながらも元気に過ごしている。この体験を機に、家族皆でしっかりとバランスのとれた食事をすることを心がけたり、自分や家族の健康を考えたることができるようになった。これからは家族全員がそろっている当たり前に感謝して、健康第一で過ごしていこうと思う。

い程の真っ青な顔をして、もう体調を伝えることもできない状態だった。いつも気丈な母が、真っ青になり腰を抑え動けなくなっているのを見て、病院へ早く行けばよかったと後悔した。幸い姉の冷静な判断のおかげで、すぐに救急車が到着し母を病院まで運んでくれた。この救急車内で「大動脈破裂」と診断されたらしい。私と弟は、とても怖かったが夜中だったため、家で母の無事を祈り留守番をしていた。何時間か経った頃、姉から電話がかかってきた。嫌な予感を感じながら電話に出た。電話越しの姉は泣いていた。思い出したくないくらいに怖かった。「今手術しているから、落ちついて病院へ来てね。」その言葉だけだった。病院へ向かった。その時の記憶はほぼないが、母が元気であることが当たり前になっっていた日常が崩れ、涙が止まらなかったことは覚えている。病院に着き、悲しみで狂ったような父を見て、本当にただごとじゃないかと確信した。その時だった。部屋に医師が入ってきて「一回目の手術は成功しました。」と言った。そこから母はICUに入り危篤状態の日が一週間続いた。チューブにたくさん繋かれ目を覚まさない母を見ながら、私達は祈るような思いで一週間を過ごした。ある日学校から帰ると、玄関で父と姉が大歓喜していた。「母の意識が戻った。」一瞬その言葉を変換できなかつた。ついに母が目覚ましたのだ。嬉しいという言葉に収まりきれない気持ちだった。そこから母は鉄人のごとく